D. H. ロレンス研究

——『馬で去った女』及び『チャタレイ夫人の恋人』に共通する「人間の根源的自我の回復」に関するロレンスの思想について——

塩　崎　祐　一

序　論

英国の作家・詩人，D. H. ロレンス（David Herbert Lawrence, 1885-1930）は『アメリカ古典文学研究』（*Studies in Classic American Literature*, 1923）の中に収められているナサニエル・ホーソン（Nathaniel Hawthorne, 1804-1864）の『緋文字』（*The Scarlet Letter*, 1850）をめぐる評論の中で次のような一節を残している。

> 「血の意識は心の意識を圧倒し，抹消し，その力を無に帰してしまう。
> 心の意識は血の意識を絶やし，血を焼き尽くしてしまう。
> 我々の意識は全て，この両方の意識を備えているのだ。そして，この両方の働きが我々の内面の中で互いに対立しあっているのだ。」(1)

ロレンスによると，白人（西欧人）の精神が肉体の行為を「罪」として意識するようになって以来，我々の自我は「血の意識」と「心の意識」とに分裂してしまっていて，そのふたつの意識は個人の内面において相剋している状態にあるという。我々の内面においては，「血」は「理知」によって認識されることを憎悪するし，また，「理知」は「血」の行為というもの

に恐怖感を抱いており，その意味で今日の我々は「二元的な存在」であり我々の自我は「分裂」した状態にあるというのだ。「血の意識」とはロレンスがよく用いることばのひとつであるが，人間の理知的・精神的な表層の意識に対峙する本能的・根源的な深層の意識，または肉体の内に宿る意識と解釈できるものであろう。現代，我々の生活は精神的なものに絶対の信頼を委ねている状態だが，「僕の偉大なる信仰は，知力よりも賢明なものとして，血を，肉体を信じることだ」(2)と語っているところからも推測できるとおり，直観主義を生活信条に置いたロレンスにとっては，我々の生活は「血の意識」に基づくものであって「心の意識」はそれに付随するものにすぎないといえる。そして，ロレンスのこのような態度は，作品の中に，特に文体的な特徴として現われているように思える。1922年に出版された『無意識の幻想』(*Fantasia of the Unconscious*, 1922) の中で，「小説とか詩というものはペンから識らぬ間に流れ出てくるものなのだ」と述べているが，実際に彼は多くの作品を完成させる途上で，何度となくその作品を最初から書き直しているように，単純に文章を書くという以上に人間の意識が加わるような文章の再構成や添削という作業を嫌っていたことが推察できる。言い換えるならば，ロレンスの著作は，全て彼の「血の意識」が直接に感じたことを表記したものだといってもよいであろう。

人間の思考様式は，文字を使用するようになって以来大きな変更を余儀なくされたと言われている(3)が，特にルネサンス以降，西欧においては合理的な思考様式が確立され，人間は表層的自我である「心の意識」を発達させ，反面，深層的自我である「血の意識」を圧迫し続けてきた。このような人間の理性偏重主義は英国においては産業革命を引き起こし，さらにプロテスタンティズムの倫理観と結び付いて資本主義的な産業社会を出現させ，この社会のシステムはたちまちのうちにヨーロッパ社会をはじめ，全世界を席巻していった。結果として，我々は物質的な享楽を受けることが容易になったが，その反面で「人間の疎外化」という言葉で代表されているように，現代の産業社会が内包する機械的・自動的なシステムによっ

て，我々はややもすると人間性を無視されがちで，生命感を喪失させられていった。ロレンスとほとんど同時代に同質の危機感を持っていた詩人エリオット（T. S. Eliot, 1888-1965）は，そのような生命感を喪失し，半ば自動的・機械的に生活している人間の姿を捉えて，「われらはうつろな人間」で「頭には藁がつめ込まれている」(4)と表現しているが，特に第一次大戦後の西欧においては，この精神風土の荒廃が決定的なものとなっていたことは間違いないであろう。

ロレンスは，現代の生命感を涸渇させるような産業社会のシステムは，人間の「心の意識」，理知的で精神的な表層の自我がひとり歩きした結果として成立したものだと考え，このような社会の中で本来の人間性を回復するためには，抑圧され続けている「血の意識」を再び呼び覚まし，精神と肉体の均衡を取り戻し，さらに宇宙，ならびに自然との有機的な連繋を見い出さなければならないと考えている。キリスト教，特にカトリックの中に近代的自我のひとり歩きに対する歯止めを見い出そうとしたエリオットに対して，ロレンスはさらにその文明の枠をも超越した宇宙との有機的な連繋の中に人間性回復のビジョンを見い出そうとしていているように筆者には感じられる。

さて，本論においては，まず作家ロレンスを取り囲む環境・時代背景について通観し，次いで，後期の作品である短編『馬で去った女』（The Woman who rode away, 1928）と長編『チャタレイ夫人の恋人』（Lady Chatterley's Lover, 1929）をとりあげて，それぞれの作品に登場するヒロインたちが，この「血の意識」に目覚めていく過程を考察し，上述したロレンスの思想を実証し，再確認してみたい。

なお，本論中の『馬で去った女』及び『チャタレイ夫人の恋人』の本文引用は，それぞれ岩倉具栄氏，伊藤整氏の翻訳（共に新潮文庫版）に依っている。

本論

第一節　環境と時代背景

D. H. ロレンスは，1885年9月11日，イングランド中部に位置するノッティンガム市の近郊・イーストウッドという街に生まれている。このロレンスが生まれ育ったイーストウッドは，美しい森と湖（正確には貯水池）に囲まれた牧歌的な土地であると同時に，イングランド有数の炭坑地帯としても知られている土地であった。ロレンスの父（Arthur John Lawrence, 1846-1924）もイーストウッドにあるブリンズレー炭坑で働いており，仕事の帰りには炭坑の仲間と酒を飲み歩くことを習慣にしていたという，いかにも炭坑夫らしい本能的・直感的な人物であったといわれている。ロレンスが晩年に述懐するところによると，ロレンスの父はしばしば酩酊して帰宅することがあったが，現代の労働者（ロレンスの世代の労働者）がほとんど失ってしまっている生きること，働くことの本質的な喜びを知っていた人物だったということだ。一方，ロレンスの母（Lydia Lawrence, 1851-1910）は，この炭坑で働いている父親とは対照的な理知的で教養のある婦人で，清教徒的な厳格な価値観・倫理観を身に付けた女性であった。このような飲酒癖のある夫と絶対禁酒主義の清教徒的な妻の間に争いは避けられないことであった。

「私の母は，いくつかの事柄に関しては確固たる考えを持っていたが，そのひとつは人はビールを飲むべきではないということである。この彼女の信念は当然のことながら私の父親がビールを飲んでいたことに起因している。父は時々飲み過ぎることがあり，家族の生活費を大酒を飲むことで浪費してしまった。それゆえにビールを飲むことは，私

の母にとっては極めて重い罪になったのである。」(5)

ロレンスの自伝的小説といわれる『息子と恋人』(*Sons and Lovers*, 1913) に登場するモレル夫妻のように，この直感的・本能的な父親と理知的・清教徒的な母親との間には確執が絶えなかったらしい。また，この小説の中でモレル夫人は，飲酒癖が治らない夫に対して愛情を感じることができなくなったため，息子たちを彼女が理想とする青年に育てあげることに熱中するようになっていくが，実際に，ロレンス自身も母親からの期待を少なからず背負って少年期を過ごしたものと思われる。このことは，ロレンスが父親のような炭坑夫にはならないで，ハイスクール卒業後，ノッティンガム大学に学び，教員資格認定試験で主席合格者となって，ロンドン近郊で教鞭を取っていたことからも推測できる。ロレンスは彼の青春時代を母親の期待に答えるという形で過ごしたのである。

さて，この時代，前世紀から始まった産業革命の余波はしだいに田園地帯にも及び始め，ロレンスが生まれ育ったイーストウッドも急速に牧歌的な風景を失いつつある状態にあった。炭坑でも機械化がすすみ，かっての炭坑請負制度 (butty system) から，より合理的な会社経営へと操業体制も変わり，以前は生き生きと働いていた炭坑夫たちも，ロレンスが青年になった頃には労働条件も厳しくなり，彼らの顔からは生気が失われていったということがロレンスの晩年のエッセイ (Nottingham & Mining Countryside) で述べられている。このエッセイによれば，1926年（イギリス全土で大規模なゼネストが発生した年にあたる）にイーストウッドの炭坑で長期にわたるストライキが発生したということが記録されており，このストライキの中では労使間の対立はもとより，生活のためにしかたなく炭鉱に戻るものとストライキを続行するものとの憎しみ合い，言い換えれば労働者間の対立も生じたらしく，ロレンスの父親の世代が保っていたというある種の連帯感というものは見られなくなってしまったという。ロレンスはこのような短期間のうちに生じた人間による自然の破壊，または

人間同士の対立の原因をヴィクトリア朝時代の合理的産業主義，ひいては人間の理性を重視する近代合理主義的な考え方の中に，さらには金銭所有を正当化したプロテスタンティズムの中にあるのではないかと感じている。

「金銭に取り憑かれた中産階級や産業の推進者が輝かしいヴィクトリア朝時代に犯した最大の罪は，労働者の運命を醜悪なもの，不快なもの，見苦しいものにしてしまったことにある。卑劣な行為に加えて，環境，思考，宗教，希望や愛，衣服や家具，労使間の関係など，すべてのものを醜悪なものに変えてしまったのだ。」(6)

ロレンス自身も気が付いているとおり，彼が生きた時代というのは，それまで無条件に善なるものと考えられていた科学技術の進歩・産業の発展が，自然環境の破壊や人間の疎外というものをもたらし，決して明るい未来を約束するものではないということが認識され始めてきた時代であったといえるだろう。特にイギリスにおけるヴィクトリア朝時代には，清教徒的な勤勉さ・清潔さを尊ぶ風潮があったために，人間の本能的な活動が抑制させられたり（一部はその反動のために世紀末的な退廃した雰囲気を生み出したが），表面的な生活を余儀なくされ，これらは「人間の生」を萎縮させるものとなっていった。そして，ロレンスはこの「人間の生」を萎縮させている近代合理主義や清教徒的な価値観に対して著作活動という手段で戦いを挑んでゆくのである。

第二節　『馬で去った女』について

短編『馬で去った女』の舞台は，メキシコの山岳地帯にある銀鉱とその銀鉱を取り囲む山々の彼方にあるインディアンの部落であり，時代設定は「大戦が来て去った」と書いてあることから1919年以降の設定と思われる。第一次大戦後は銀の市場価値が低くなったため，この銀鉱の所有者で

あるレダーマンは銀山を閉山し，牧場経営という新たな活路を見い出していた。このレダーマンという人物には『チャタレイ夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*, 1928) に登場しているクリフォードや『恋する女たち』(*Women in Love*, 1920) のジェラルドと同じような産業合理主義を信奉する性格が与えられており，彼にとっては結婚でさえも「自分の工場の最後の，そしてもっとも親しい一部」であり，「センチメンタルな収入をもたらす仕事の一部」なのであった。そして，下半身不随のクリフォードが道徳的な立場から精神的な圧力でコニーを拘束したように，このレダーマンという人物も彼の妻を道徳的な立場から支配し，屈服させ，打ち勝ちがたく隷属させている。

この短篇の主人公はレダーマンの妻で，彼女の心のうにはしだいに夫との不毛で単調な結婚生活から逃げ出したいという感情が芽生え始めていたのであるが，あるとき，夫と彼の友人がインディアンの生活について議論しているのを聞いて以来，彼女の気持ちは山の彼方の部落で生活をしているというインディアンに魅かれていくのであった。

> そして未知のインディアンに対するこのぼんやりとした熱狂は，彼女の女性の心の中に十分な反響を与えた。彼女が少女が抱くよりも非現実的な愚かなロマンティシズムに圧倒された。これらの時間を超越した，神秘的なインディアンの隠された生息地をさまよい歩くことが彼女の運命であるかのように感じられた(7)。

とうとう彼女はレダーマンが外出している間に「私は絶えて一人にしてもらえないのかね。ただの一秒でも。」という言葉と二人の子供を残し，馬の背にまたがり家を出てしまう。馬上の人となった彼女は途中で数名のインディアンと遭遇し，彼らとともにチルチーと呼ばれる部落へと足を踏み入れていくのであるが，これらのインディアンと接しているうちに，しだいに彼女は「何かが自分の中心でぶちこわれる大きな音」を感じるように

なり，自分自身の意志というものが徐々に薄れていく感じを覚えていく。数日間の行軍の後，彼女はついにチルチーの部落へ到着し，部族の長老に紹介されることになった。この場面で，彼女はなぜ自分がチルチーにやって来たのかということをスペイン語で話せるインディアンを通じて明言する。

「あなたはここで何を求めているかと長老はたずねています。」と若いインディアンがスペイン語で言った。

「私？　何も求めてなんかいないわ。ただどのようなところなのか見に来ただけのことよ。」

この返答が再び通訳され，老人はもう一度彼女に視線を向けた。それから彼は再び，低いつぶやくような声で若いインディアンに話しかけた。

「あなたが白人の家を去るのはどういうわけか，白人の神のチルチーへ持ってきたいのかとたずねています。」

「いいえ。」と彼女は無鉄砲に答えた。「私は白人の神から自分で逃げ出してきたの。チルチーの神を探しに来たのよ。」

この言葉が通訳されたときには，深い沈黙のときが続いた。やがて老人はけだるそうに小声で話し始めた。

「白人の女は自分の神に飽きたのでチルチーの神を求めるのか？」という質問が発せられた。

「ええ，その通りよ。白人の神には飽き飽きしているわ。」と彼女は，このように言わせるのが彼らの望みなのだろうと考えながら答えた。彼女はチルチーの神に仕えることを望んでいた(8)。

この場面まででは彼女の本意が本当にインディアンの生活に興味を持っているのか，それともただの好奇心なのかということは理解できないが，それでも彼女の「白人の神を捨ててきたのよ。」と語る言葉には意味深いも

のが感じられる。さらに数日間の軟禁状態が続く中，彼女は部落の広場で繰り広げられるインディアンの舞踏を目撃する。太鼓の音が鳴り響き，インディアンの男たちはむき出しの肉体を羽飾りなどで装飾し，単調な足取りで地面を踏みしめ，非人間的な声で合唱している。インディアンの女たちも同様に羽と貝殻で装飾された頭巾をかぶり，手首をリズミカルに振りながら踊りの輪に加わっている。まるで原始時代さながらの舞踏である。(実際，ロレンスはニュー・メキシコのタオスに滞在していたとき，インディアン保護居留地を訪れ，彼らの舞踏を目撃していたが，そのときの体験がいかされているようだ) 彼女は「まるで麻薬でも飲まされたかのように」何時間もこのインディアンたちの原始的な舞踏が行われている光景をみつめていた後，とうとう彼女は「己れ自身の死を，己れ自身の喪失」を感じるようになり，彼女の「極めて性格的で個性的な自我」は崩れ去っていくのであった。これまで西欧社会の価値基準に従って彼女が築いてきた自我が，インディアンの舞踏の前にもろくも崩れていくのである。

この場面の後，スペイン語を話すことができる若いインディアンと彼女との会話が続き，この会話の中で若いインディアンは彼女に対して，インディアンの社会が失ってしまった勢力を取り戻すために自分たちの犠牲となってもらいたいということを語り始める。

「白人たちは何も知らない。彼らはどんなときでも玩具を手放さない子供のような連中だ。我々は太陽を知っている。月を知っている。だから我々は言っているのだ。白人の女が我々の神々の犠牲になれば，我々の神々は新しく世界を創造し始め，白人の神は粉々に砕け落ちるだろうと。」

「どのように犠牲になるの？」と彼女はすばやく尋ねた。

彼もすばやく微妙な笑いを残して，「つまり自分の神を犠牲にして，我々の神々のもとへ来るのだということです。」と宥めるように言った(9)。

「白人は我々から太陽を盗んでいってしまった。しかし，白人たちは太陽の扱い方を知らない。白人の女たちも月をどのように扱ってよいのか分かっていない。我々は再び太陽を奪い返さなければならないのだ。」というインディアンの考えを聞かされた彼女には，さらに麻薬のような薬草酒が与えられ，彼女の内部からは「日常的個人意識」が消え去り，「森羅万象の中に溶け込むような気分」や「宇宙的な意識」を彼女は感じるようになっていく。とうとう彼女は「あなた達が太陽を取り房すのを望んでいるわ。」と答えるようになってしまう。いよいよ儀式の日が近づき，彼女は若いインディアンにただひとつだけ質問した。

「なぜ私だけ青い服を身に着けているの？」

「それは風の色を意味しているのです。青という色は消え去ってしまえば二度とはここに戻ってこないものであるが，いつでもこの場所にあり，我々の間における死のように待ち受けているものの色なのです。青は死者の色なのですよ。遥か彼方に立って，我々を遠方からみつめてはいるものの，決して近寄ってはこれないものの色なのです。我々が近寄っていけば遠くへ行ってしまうもので，決して近寄ることはできないものなのです。我々の髪は茶色か黄色か黒であり，歯は白く血は赤い。我々はここの場所にいる人間です。あなたの瞳は青い。あなたは遠くからやってきた使者でここに長くは留まることはできない。そして今こそあなたの帰っていくべきときなのです。」

「何処へ？」と彼女は尋ねた。

「太陽や青い雨の母のような遥かなるもののもとへ。そして彼らに告げていただきたいのです。我々は再び地上の民となって赤い雄馬を青い雌馬のもとへ連れて来るように，太陽を再び月のもとへ連れて来ることができるということを。我々はそれができる民族なのだということを告げていただきたいのです。白人の女たちは月を空中で追い返し，

太陽のもとへ至らしめない。だから太陽は怒っているのです。そしてインディアンは月を太陽に与えなければならないのです。」

「どのように？」と彼女は言った。

「白人の女は死んで，風のように太陽のもとへ赴き，インディアンが太陽には門を開くであろうということを告げなければなりません。そしてインディアンの女たちも月に対して門を開くだろう。白人の女たちは月を蒼い囲いから出さない。月は，白い山羊が花の中にやって来るように，インディアンの女たちのもとへやって来るのが常だった。そして太陽も，鷲が松の木にやって来るように，インディアンの男たちのもとへ降りてこようと望んでいる。しかし，太陽は白人の男たちの後に閉め出されて逃れることができない。彼らは怒っている。世の中のあらゆるものがますます怒りに満ちてきている。インディアンは言っている。太陽に白人の女を与えようと。そうすれば太陽は白人の男の上を飛び越して，再び我々インディアンのもとへやって来てくれるだろうと。」(10)

このインディアンの話しによれば，白人（高度な文明を発展させ，自然を征服し利用するべきものと考えてきた西欧人と考えてもよいと思われる）は「太陽」や「月」の扱い方を知らないので，太陽や月を含めた世界を構成しているすべてのものは怒りを感じているのだと語り，宇宙・自然の秩序のあり方を理解しているインディアンのもとへ「太陽」や「月」が戻ってこれるように，白人の女は使者として「太陽」のもとへ送られなければならない，つまり「生けにえ」として捧げられなければならないというのである。「太陽」とか「月」とかという表現はかなり象徴的で理解しにくいものだが，ロレンスは1922年に出版された評論『無意識の幻想』（*Fantasia of the Unconscious*, 1922）の第13章・宇宙論の中で「太陽」の概念を「生物体が死ぬとその固体から飛び出して彼処へ赴き，再び生物体に復帰する波」なのだと説明している。ロレンスにとって「太陽」とは，

科学的な理論などではとても説明できるものではなく，「太陽」とは「無生物宇宙の偉大な中枢」・「物質的な死の中枢」であって，あらゆる生物と「太陽」との間には「ダイナミックな連繋」があるのだと述べている。生物の魂というものは「蒸発する水が太陽に直昇してはまた復帰するように」固体と太陽の間を往来するものと考えているのだ。このようなことを念頭に置くと，インディアンが語る「太陽」とはあらゆる生命の源，または宇宙や自然の秩序を握る中心と考えることができそうだ。そのような意味を持つ「太陽」を我々文明人は理解することができないとインディアン（ロレンス）は彼女（読者）に語りかけているのである。

さらに数日後，様々な儀式がとり行われたあとで，とうとう彼女がインディアン社会が再び勢力を取り戻すための犠牲として処刑される日がやって来た。数多くのインディアンが狂気乱舞する中で，彼女はいよいよ自分の最期の瞬間が来たことを意識するのであった。

> 彼女はかごの中に座り，大きな青い瞳でかごの外を眺めていた。その瞳には麻薬の影響のためであろうか，けだるさが湛えられていた。この輝く雪の中で，この華麗な蛮人たちの手によって，自分が死のうとしていることを彼女は知っていた。そして彼女は重々しく切り立った山の上に広がる青い空の閃光をみつめながら考えていた。「私はもうすでに死んでしまっているのだわ。死んでしまっている現在のこの場所から，まもなく死んでいく将来の自分へ移っていくことに何の違いがあるかしら？」と(11)。

結局この短編は，インディアンの長老が彼女を短刀で突き刺そうとする瞬間で幕を閉じている。常識的に考えてみても，かなり非現実的なストーリーでロマンス的な世界が描かれている。しかしながら，この短編の作者が終始一貫して現代文明を批判し，人間と自然，人間と人間との本来あるべき関係の修復を追求し続けた作家であったことを考えると，次の場面が

いったいどのようなことを象徴しているのかということが推測できそうである。ひとつは,「白人の神を捨ててきた」という彼女がインディアンと接触しているうちに「自分自身が死んでいってしまう」という感覚を覚え始め，インディアンの舞踏を目撃したり，麻薬を飲まされたりすることで，彼女の表面的な自我（日常的個人意識）が崩壊していってしまうという場面。もうひとつは，一人の若いインディアンが彼女に対して，インディアンの社会が失ってしまった勢力を回復させるために犠牲となってほしいと語る場面である。

一般的に，近代合理主義はルネサンスと宗教改革に始まるとされている。ルネサンスはそれまでの中世的な世界観（神を中心とする世界観）から人間を開放し，人間中心主義の基調をもたらした。また，宗教改革によるキリスト教の世俗化というもの（特に営利活動を正当化したカルヴィニズム）は，後には資本主義を生み出していく原動力となっていき，このプロテスタンティズムの個人と神との道徳的関係を重視する態度は，人間の自我意識の強化にもつながっていった。デカルトの「我思うゆえに我あり」というテーゼは，しだいに強化されていった自我意識の確立を表現したものとして有名であるが，このような時代の流れは，人間の世界を把握する出発点というものを公の規範から個人の格率へと移していった。しかし，ロレンスが『アポカリプス論』(Apocalypse, 1931) のなかで「我々は不自然にも宇宙との結びつきに抵抗しているのである」と述べているとおり，このような人間の自我の確立というものは，逆にいえば我々を取り囲む宇宙や自然が持つ秩序との有機的な関係を断ちきるようなものだともいえるのである。

「知は力なり」という言葉を残してこの世を去ったベーコン以来，西欧社会は「進歩」とか「理性」とか「啓蒙」という言葉のもとに科学技術を発展させ，人間の本性を暗闇の世界へと追い払ってきた。たしかに科学技術の進歩は人々の生活を向上させたが，その一方で自然環境を破壊したり，本来の人間性が抑圧されざるを得なくなってしまったのも事実である。ま

た，ロレンスが在命中には史上初めての世界大戦が勃発し，人間の生活に役立つはずの科学産業は人間の生活をおびやかすものとなってしまった。それまでは無条件に善なるものと考えられてきた科学技術の進歩も，20 世紀に入ってその軌道修正が必要と感じられ始めてきたのである。この作品の中でインディアンが語ったように我々文明人は「太陽」の扱い方（宇宙・自然の秩序への対処）を知らないのだろうか？　少なくとも，ロレンスは，当時の西欧社会の中で生活する人々にはこの能力は備わっていないと考えたに違いあるまい。それでは，いったいどのようにして，この「太陽」を扱える能力を手に入れることができるのだろうか？　どのようにすれば，「宇宙との有機的なつながり」を回復させることができるのだろうか？　ロレンスはそのビジョンを示すために「彼女」をインディアンの部落へと旅立たせのである。

さて，『馬で去った女』の中で，「彼女」が原始的なインディアンの舞踏を目撃したことで自らが分解していくのを感じとり，インディアンの社会を再興させるための犠牲になるという過程を通して，象徴的な「再生」を克ち取る姿を描き出したロレンスは，別の視点からこれと同質の「テーマ」を執拗に追うことになる。次節では，「彼女」と同じような現代的・精神的な自我意識を持つひとりの女性が，性的な交渉を経験を経て肉体的な自我に目覚めさせられるという，より具体的な「再生」が描かれている長編『チャタレイ夫人の恋人』について考察することにする。

第三節　『チャタレイ夫人の恋人』について

物語の主人公であるコニーは，夫となるクリフォードと知り合う以前，姉のヒルダとともにドイツへ留学し，ドイツの青年と「試験的な恋愛」を経験している。この頃のコニーにとっては恋愛や性というものは「ただ単に原始への復帰に過ぎず，恍惚感を低めるだけのもの」であり，性器官とは「退化した妙に陳腐なひとつの器官にすぎないくせに，まだ肉体にしが

みついて我々を困らせるもので，本当は不必要なもの」と捉えている。彼女はまた，性とは「欲望を持った子供のような」男性を満足させるために耐えなければならないものであって，どのようなことがあっても恋愛や性を通して自分自身を見失うことがあってはならないと考えていた。このように『チャタレイ夫人の恋人』の冒頭部に描き出されたコニーは，自分自身を見失うような感情的な恋愛に没頭するよりも，「哲学や社会学や芸術上の問題について議論を交わすこと」に喜びを見出すという現代的な女性であった。

第一次世界大戦の勃発と同時にコニーは英国に戻り，同じくドイツから帰国したクリフォードと知り合い，結婚することになる。クリフォードという人物は，後にロレンスが『チャタレイ夫人の恋人について』(*Apropos of Lady Chatterley's Lover*, 1930) というエッセイの中で説明しているところによると，「周囲の男たちとも女たちとも慣例的な付き合いのほかはあらゆる繋がりを失っている」パーソナリティで，彼は「私たちの時代の純粋な産物ではあるが，世界の偉大な人間性の死を象徴する存在」として登場する。このクリフォードは，名門とまではいかないがそれでも貴族階級に属しており，父親は従男爵で母親は子爵の娘でもあった。一ヶ月のハネムーンを楽しんだ後，クリフォードはある連隊の中尉として戦地へ赴くことになったが，その六ヶ月後，彼は戦地で負傷し英国に送り返された。命こそ失わなかったが，彼の下半身は後遺症のため永久に動かなくなってしまい，車イスでの生活を余儀なくされてしまう。また，クリフォードの兄も戦死したために，チャタレイ家の後継者となった彼は，「もう絶対に子供を持つことができないと知りつつも，彼の力の及ぶ限りチャタレイ家を絶やさぬようにする」ために，コニーとともに生活を始めなければならなかったのである。当初，性的交渉など不必要なものと感じていたコニーにとって，下半身不随となってしまったクリフォードとのストイックな関係は特に不満をもたらすものではなく，彼女は，ラグビー邸を引き継ぎ小説家として再出発しようとしているクリフォードを介護し，良き話し相手と

なっていた。

しかし，第二章以降になると物語は急速に変化してくる。はじめのうち精神的な生活に好感を抱いていたコニーは，しだいにラグビー邸での生活に空虚さを感じるようになってくるのである。ラグビー邸を訪れる客人との対話や彼の仲間たちとの無意味な議論の繰り返し，また，クリフォードとのふれあいのない生活，訪問客たちを除いてほとんど外界との接触のない生活は，コニーから徐々に落ち着きを奪っていった。彼女はぼんやりとではあるが「自分がなんとなく滅びてゆくこと」を感じ，「自分が外界から切り離され，実体と生命のある生活との接触を失っていること」に気付きはじめてきたのである。ラグビー邸を訪れる客人の一人，トミー・デュークスは，精神的な生活というものを「樹からもぎとられた林檎のようなもの」だと言い，「もぎとられた林檎が腐ってしまうように，自然との有機的な繋がりから離れてしまっている精神的な生活は人間を腐らせてしまうのだ」といような説教めいた言葉を口にする。だが，このようなデュークスの説教も結局は議論上の言葉に過ぎず，コニーの心をゆり動かすことにはならないのである。逆に互いに議論し合い，自己満足の笑みを浮かべている客人達に対して，コニーは憤懣の念を抱かずにはいられなくなるのであった。彼らは文明が崩壊している状況にあることを知りながら，その現実から逃避するために，あるいは内面的な空虚感をまぎらわせるために，饒舌な会話に没頭しているのである。結局，客人たちの会話は言葉の遊技にすぎないものであり，彼らの言葉は現実生活から遊離してしまっていたのである。このようなわけで，彼女のラグビー邸での生活は全く実体のない観念の中でだけの生活であった。

> コニーは自分の時代の人間にとっては，あらゆる偉大な言葉が意味を失っているような気がした。恋愛，喜び，幸福，家庭，母，父，夫，これらすべての力強い言葉が，いまでは半死の状態にあり，日々死滅に近づいていっている。家庭とは生きている場所のことであり，恋愛

とはその中で自分を失うまでにはなれないものであり，喜びとは上手なチャールストンに付けた名であり，幸福とは他人を煙にまくための偽善の言葉であり，父とは自分自身の存在のみを享楽した人間のことであり，夫とは一緒に暮らして精神的に交際している人間のことなのだった。そしてセックスという最後の偉大な言葉は，一瞬間だけ人をけしかけて，それから後にはさらにみじめな思いをさせる興奮に使うカクテルの名前であった。擦り減ったものばかりだ！(12)

かっては「艶のある小麦色がかった肌で，髪はやわらかく褐色であり，生れつき丈夫なからだをしていた」コニーではあったが，ラグビー邸での精神的な生活はそのような彼女からしだいに生気を奪い取っていった。彼女の肉体は無意味なものとなり，取るに足らないものになっていったのである。コニーは精神生活というものに「狂おしいまでの憎悪」を感じるようになっていく。

さて，物語の進行に伴い，ラグビー邸での空虚な生活に耐えているコニーに新しい展開が生じ始めてくる。ラグビー邸の森を管理しているメラーズとの出会いがそれである。メラーズは後に分かることなのだが，軍隊に所属していた頃には中尉にまで昇進したこともあり，『チャタレイ夫人の恋人』の第一稿や第二稿の森番であるパーキン（第三稿において，森番の名前はメラーズに変更されている）のような労働者じみた外見は消えている。また，メラーズはパーキンとは異なり，標準英語を話すことができ，意識的に方言と標準語を使い分けている。コニーがクリフォードに「なんだか彼は紳士みたいだわ」と言っているように，第三稿の森番は教養と礼儀作法を身に付けた人物として登場しているのである。

さらに，章がすすむにつれて，コニーの森への逃避が目立つようになり，森番と接触する機会が多くなってくると，コニーのそれまで身に付けていた精神的な自我はしだいに崩れ始め，一人の女性としての本能的・肉体的・感情的な自我が彼女の心の中に芽生え始めてくる様子が描かれていく。

例えば，第10章では，コニーが森番の育てている雌雉が卵を温めている光景を目撃するという場面がある。雌雉は卵を守ろうとする母性的な本能を働かせているのだが，この雌雉の中に女性の本能を認めたコニーは，自分自身を「女の役目をしていない，まったく女性とも言えない，ただ一個の恐ろしい存在」にすぎないと感じ「胸が張り裂けそうな感情」を覚えるのである。さらに数日後，卵からふ化したひな鳥が鳥かごのまわりで「胸をそらして跳ねまわっている」ところを発見したコニーは，生命の持つ神秘さや暖かさというものに気が付くようになる。

> ある日，はしばみの木の下に桜草の大きな群れが咲き，道のほとりにはすみれがたくさん咲いている美しい晴れた日の午後，コニーが鳥かごのところへ来てみると，小さな小さなひな鳥が胸をそらして鳥かごの前のあたりをちょろちょろと跳ねまわっており，雌雉はびっくりして鳴き立てていた。そしてそのひな鳥は，この瞬間においては世界中で最も生き生きとした小さな一点の生命であった。しゃがんだままコニーは恍惚となってみつめていた，生命だ，生命だ！　清らかな，輝くような，怖れを知らぬ新しい生命だ。新しい生命！　こんなにも小さく，しかも全く恐れというものを持たない！……コニーは夢中になった。だがそれと同時に，自分の中の女性が放棄されているということの苦悩をこの時ほど鋭く意識したこともなかった。それはもはや耐えがたいものになってきていた(13)。

そして，このひな鳥を「ほんとうに触ってみたいわ」というコニーの願望に，森番のメラーズは一羽のひな鳥をつかまえてコニーに差し出す。

> 「さあ！」と彼は自分の手をコニーの方に差し出して言った。彼女はその小さな黄褐色のひな鳥を自分の手の中に受け取った。するとそのひな鳥はそこに，考えられないような細い小さな脚で立った。バラン

スを保っている微小な生命の震えが，ほとんど重さというもののないその脚を通してコニーの手に伝わってきた。でも，そのひな鳥は美しいくっきりとした小さな頭を大胆に持ち上げて，鋭く周囲を見回し，小さく《ぴい》と鳴いた。

「なんてかわいらしいのでしょう！　なんておなまちゃんなんでしょう！」と彼女は優しく言った。彼女のそばにしゃがんでいた森番も彼女の手の中の大胆なひな鳥をおもしろそうに見ていた。とつぜん彼は，一滴の涙が彼女の手首に落ちるのを見た(14)。

第10章のこの場面は，産業主義に汚染された低俗なテバーシャル村の様子やラグビー邸での空虚な生活が延々と描かれ続けた後であるだけに，ひとつの生命が持つ「暖かさ」が効果的に描写されているように思われる。そして，このひな鳥の持つ「暖かさ」に触れたコニーは，自分のうちに女性らしさが備わっていないことを知り，またラグビー邸での生活の精神的疲労も加わったためか，「彼女の生きている時代のすべての惨めさを苦しみ悩むかのように」泣き続けるのであった。現代的な女性が持つ我執というものに嫌悪感を抱いていたメラーズではあったが，このひな鳥に触れて「盲目的に泣いている」コニーを見ていると，彼女も自分と同じく「現代文明に毒された社会の犠牲者」であるということを認め，コニーの中に「今日のセルロイド製の女性には失われているやさしさ」を見い出すのである。そして，この「やさしさ」を持つ女性を守るために，一度は幻滅した社会の中でもう一度生活を始めてみようと決意するのであった。

そしてこの場面以降，コニーは森番との性的交渉を重ね，コニーの「現代の女性として悩んできた自我」がしだいに融解されていく様子が描かれていくことになる。『チャタレイ夫人の恋人』の主題ともいえる，精神的な自我を持つ女性が，性的交渉を通じて肉体的な自我に目覚めていく過程が，また外界との有機的な連繋の重要さに目覚めていく過程が描かれていくのである。次節では，コニーとメラーズ，この二人の性をロレンスがどのよ

うに描写しているのか考察してみたい。

第四節　『チャタレイ夫人の恋人』における性的描写について

「人間が最も激しく希求するものは，その生ける完全性であり，生ける連帯性であって，己が魂の孤立した救ひといふがごときものでは決してない。人間はまず第一にほかの何事よりも己れの肉体的充足を求める。少なくとも，この今は，一回，たった一回かぎり，彼は肉体の衣をまとひ，生殖力を持つことを許されているのではないか。人間にとって大いなる驚異とは生きてゐるといふことである。……我々は生きて肉のうちにあり，また生々たる実体を持ったコスモスの一部であるといふ歓喜に陶酔するべきではなかろうか。」(15)

ロレンスは晩年に書かれた評論『アポカリプス論』(*Apocalypse*, 1931) の中で，我々人間は「生きている」ということに驚異を抱き，我々が宇宙・自然と一体のものであるという認識を抱くことが大切であると語っている。時として私たちは，「なぜ，この指は意志通りに動くのだろう？」とか「なぜ，ものを認識し，思考することができるのだろうか？」ということを自問し，稀にその肉体の持つ神秘さを意識することもあるが，ほとんどの時間をこの「生きている」という驚異を意識することなしに過ごしているのが普通であろう。特に現代のような，物欲に囲まれ，時間に追われている社会の中ではなおさらのことである。もっと「生きている」ということに対する驚異や神秘さを認めなければならないのに，現代の我々は超自我的な抑圧のもとに，不自然にも自らを苦しめてしまっている場合が多いのではないだろうか？

また，ロレンスは『チャタレイ夫人の恋人について』(*Apropos of Lady Chatterley's Lover*, 1930) というエッセイの中で，我々現代人には精神と

肉体のバランスが失われているということを次のように指摘している。

「人生は，精神と肉体が調和して，初めて耐えられるものとなるのだ。この二者のあいだには本来釣合いがあるのだし，二者は本来相反するものではないのだ。ところが現代ではこの二者のあいだには釣合いも調和もない。肉体はせいぜい精神の道具であるぐらいのものだし，悪くすると玩具に堕しかねない。」(16)

ロレンスは，人間の自然な生理を邪悪なものとみなしてきた旧来のピューリタン的な価値観も，また現代的な若者のあいだにみられるような，肉体を「一種の玩具」とみなし，単に刺激を得るためだけのものだとしている考え方も，両者とも肉体の軽視に繋がっていると考えている。前者の価値観は，人間の「肉」をおとしめて，「霊」による支配を説くキリスト教的な人間観・世界観によって培われ，さらにヴィクトリア朝以来の因習的な道徳を美徳とする風潮の中でさらに高められてきたものであり，後者の考え方は，その反動として半ば必然的に生じた世紀末的な退廃した雰囲気の中に，その影響があるのではないだろうかと思われる。「あらゆる感情は肉体のものであり，精神はそれを認識するだけにすぎない」(17)と考えているロレンスにとっては，この肉体の軽視は「感情と情緒の生活」の軽視につながり，今日多くの人々は真の感情を持つことができず，偽りの感情をもって生活しているのだと語らざるを得ないのである。「私は，人間のあいだにこれほどまでに不信感が増大した時代は，今までになかっただろうと信じる」(18)とロレンスは語っているように，20世紀に入り，さらに合理的な産業主義，金銭中心主義が蔓延した社会の中にあっては，我々は自己の疎外感を抱かずにはいられなくなり，自然や他者との生き生きとした連帯感の喪失という状態を感じざるを得ない状態にある。このような渇ききった現代の「荒地」に潤いをもたらすことは果たして可能でなのであろうか？　また，どのような処方箋を与えれば，この喪失感を回復させること

ができるのであろうか？　ロレンスはこのような問いに「コニーの再生」を描くことで，彼のビジョンを示そうとしている。引き続き，コニーがメラーズとの性的交渉を通して肉体的な自我に目覚めていく様子を，通常，翻訳では削除されている個所を中心に展開していきたい。

さて，森へ逃避することによって，生命の暖かさというものを意識し始めたコニーは，森番のメラーズとの「やさしい触れ合い」（性的交渉）を通して，段階的にではあるが，彼女のうちに眠っていた肉体的な自我が目覚めてくる。第10章では，ひなの持つ暖かさに触れて「盲目的に泣いている」コニーを見たメラーズは，「もう永久に消えてしまったものと思っていた昔の焔が，彼の腰部でほとばしり跳ねあがった」ことに気がつき，彼の心の中にはこの「哀れな女」を温めてやりたいという感情が生じるのであった。メラーズは彼女を小屋へと招き入れ，ふたりは初めて性的な関係を結ぶことになる。

> 「……それから彼は，深い快楽に身を震わせながら，彼女の温かくて柔らかい肉体に触れ，ちょっとだけ臍に口付けをした。すぐに彼女の肉体に，この世で一番の平穏をもたらすであろう動きを止めた彼女の柔らかな肉体に挿入せずにはおれなかった。女性の肉体に挿入を果たしているときは，彼にとってはまさしく清らかで平穏なひとときであった。彼女は眠っているかのように，いつまでもじっと横たわったままであった。激しく動き，オルガスムに達したのは彼であり，彼だけであった。なぜなら彼女は自ら努める気持ちがもはや起こらなかったからである。」(19)

注目したい箇所は，この時点ではまだコニーの性的な交渉に対する態度が受動的であるという点である。彼女は依然として性的な男女の結合を「欲望を持った男性を満足させるために耐えなければならないもの」だと

いう考えを捨てきれていないようである。性の喜び・オルガスムは男性のものであり，性交渉は男性にだけ平穏な安らぎを与えるもので，コニーは自分自身から積極的に性的な満足感を得るには至っていない。結果として，「彼女の現代的な頭脳」は安らぎを得ることができないままなのである。しかしながら，ラグビー邸を訪れる他の客人たちと異なり，メラーズは「彼女の中にある女性」に対してやさしく触れてくれた。彼はコニーを「コンスタンス・リイド」とか「チャタレイ夫人」という個性としてみるのではなく，一人の女性としてみているのである。このようなことを漠然と理解したコニーは，「全く女性の役割をしていない，全く女性ともいえない，一個の恐ろしい存在」となっている自分自身を，彼が「本物の女性」にしてくれるのではないかという予感は抱くことができるのであった。そしてコニーとメラーズの2度目の性交渉の場面では……

> 「……コニーは彼女の太ももや腹や尻にメラーズの頬摺りを，彼の濃く生えそろった口ひげや柔らかく濃い髪が触れるのを感じ，彼女の両膝は震えはじめた。彼女の内にある根源的な部分で，彼女はそれまでにはなかった心の興奮を，以前にはなかったむきだしの裸身性が生じてくるのを感じた。そして彼女は半ば不安の感情を覚えていた。彼がそのような愛撫をしないで欲しいとも感じていた。ともかくもメラーズはコニーを包み込んでいた。彼女は（オルガスムを）待ち続けていた。そして彼自身にとって純粋な安らぎとなる安堵感と成就感の激しい動きを伴ってコニーの中に入っていくときにでも，彼女は依然として待ち続けていた。彼女は自分自身がほんの少し置き去りにされていると思った。彼女には分かっていたのだ，その責任の一部は自分にあるということを。」(20)

上記の描写を観察すると，ちょうど『馬で去った女』の中でインディアンがヒロインに呪術的なマッサージを施し「彼女」の意識を融解させたよ

うに，メラーズの愛撫はコニーの精神的な自我を融解させていく作業のようにも思われるのである。コニーは彼のそのような愛撫に半ば嫌悪感を示してはいるが，それでもコニーのずっと下方にある意識の中で，「新しい動揺」・「新しい裸身性」が生じてくるのを恐怖感を抱きながらも感じている。彼女の内にある肉体的な自我の胎動が少しずつ始まってきたかのようである。まだまだ彼女の性は受動的であるが，しだいに彼女は自分自身（精神的な自我）が脱却されていくのを感じ，性に満足感を見い出せないのは自分自身（精神的な自我）による過失だということを知り，分裂した肉体的な自我に従うことが，これからの自分に運命づけられた生き方のように感じ始めるのであった。彼女の肉体的な自我の「再生」は難産ではあるが，それでもその産声は4度目の性交渉によって聞くことができる。

> 「……彼女は彼のことを欲望の焔，しかもやさしい焔であるかのように感じ，彼女自身がその焔の中に溶けていくような気がした。彼女も自らその気になった。彼女は彼のペニスが彼女に向かっておどろくべき力と張りをもって勃起しているのが分かって，彼に身を預け，激しく震えながらも彼の色欲に応じ，彼に肉体のすべてを開いていった。ますます深く，彼女の覆いは剝ぎ取られ，肉体が作り出す大波はどこかの海辺に打ち寄せるのが激しければ激しいほど彼女は剝き出しの状態となり，知覚はますます急激に薄れていき，肉体の波はうねりながら，さらに遠く彼女の身体から離れ去っていった。そして次には，突如として，やさしく，ぞっとするようなけいれんが生じ，彼女の全原形質からなる感情の中枢がゆさぶられ，感動を覚え，彼女は性の極致に達して（肉体的な自我は成就され），彼女は死んでしまった。彼女の表層の意識は死んでしまった。いや，彼女は死んだのではなく，再生したのであった，ひとりの女性として。」(21)

コニーの表面的・精神的な自我，現代の女性として悩んできた理性的な

自我はメラーズの男根の焔によって溶かされていき，彼女からひき剝がされていく。メラーズとの性交を通して，コニーの内にある「理性」・「精神的な意識」は消え去り，彼女はひとりの「女性」として生まれ変わったのである。この場面では，性交の高まりを意味している「波」というものが，コニーの内面を支配していた近代的・個性的な自我を流し去って，原形としての生命感にも似た，人間の深層的な意識のもとに運んでくれるという象徴的な働きをしているように思われる。このようにして考えると，偏った「精神的な意識」から深層の意識を取り戻し，無意識的な生命感を再び獲得することが人間に真の幸福を取り戻させる手段になりうるというロレンスの思想を読み取ることができるように思われる。

さて，『馬で去った女』のヒロインがインディアンと接していく中で「自分自身の死」というものを感じ取ったように，『チャタレイ夫人の恋人』のヒロインにもメラーズとの触れ合いの中で「自分自身の死」というものを自覚させられなければならない時がやってくる。最後の性的描写となっている原作の第16章で……

「それは官能的情熱が燃えさかる夜であった。とはいえ，彼女は，その情熱に少しおどろくとともに，ほとんど乗り気にはなれなかった。そしてやさしさから生じる戦慄とは異なる，より鋭くかつ恐ろしい官能的で突き刺すような戦慄が再び突き上げてきた。しかし，その瞬間には，彼女が望ましいと思うものでもあったのだ。多少の恐怖感をともなうおどろきはあったが，彼女は彼のなすがままに身を任せていた。何物をもかえりみず，羞恥心も投げ捨てた官能的な感情は心の底まで彼女を揺り動かした。この感情は，彼女を生まれたままの姿に戻し，彼女の中に眠っていたもうひとりの異なる女性を呼び起こしたのであった。……もっとも秘密とされる深遠な部分において彼女の羞恥心は燃やしつくされた。彼のなすがままに，また彼の意志に支配されているということは彼女にとっては大変なことであったが，彼女は受動的

にならざるを得ず，奴隷のように，肉体的な奴隷のように彼の行為を受け入れたのであった。しかし，その情欲は彼女のまわりを這いずり回り，彼女はその行為に没頭した。そして官能的な焔が彼女の肉体の中を突き通して重くのしかかってきたときに彼女は自分自身が本当に死んでしまいそうな気がした。そしてこの死は痛烈で信じがたいものであった。……彼女は自分の心の内にある未知なる部分に到達したのであった。」(22)

この「官能的な一夜」の中で，コニーは彼女の根底の部分から揺り動かされるような行為（肛門性交）を体験する。この行為を通して，彼女が性に対して抱いていた「羞恥心」というものは完全に取り除かれ，彼女は人間のもっとも深遠なところにある自我にたどりつく。メラーズとの触れ合いの中では，コニーは「コンスタンス・リイド」や「チャタレイ夫人」というペルソナを身に付ける必要はないのである。このような個性を超越した，半ば本能的・無意識的な性交を通して，コニーは彼女の表層の自我の殻を破壊し，深層の自我のもとにたどりついたのであった。長い道程ではあったが，ここに至ってコニーの「再生」が完遂されたと言ってもよいだろう。

ロレンスは晩年の評論『アポカリプス論』の中で，現代文明に毒されている我々は「不自然にも自分のコスモスとの結びつきに，または世界，人間，国家，家族との結びつきに抵抗している」状態にあると述べている。また『馬で去った女』の中では，インディアンの言葉を借り，西欧文明人は「太陽の扱い方」を理解していないと語っている。ロレンスが生きた時代というのは，資本主義経済が独占段階に達し，国内においては有産階級と無産階級との対立が生じ，帝国主義的な列強各国はアジア・アフリカへの侵略をほしいままにしてきた時代であったし，実際にロレンスは人類史上初めての世界大戦を経験しており，その中で使用された化学兵器や毒ガ

スの存在も知っていたことであろう。そして，このような自然や宇宙の秩序に抵抗している人間のひとり歩きが始まったのは，ルネサンス・宗教改革を経てしだいに発達してきた近代的な自我意識，ことに人間の理性というものに絶対の信頼を置く合理主義にその原因があるのではないか，とロレンスは彼の「血の意識」で感じたに違いない。どのようにすればこの「人間のひとり歩き」に歯止めがかけられるのだろうか？　ロレンスは『アポカリプス論』の中で次のように述べている。

「我々が望んでいることは，虚無の非有機的な繋がりを，特に金銭と繋がっている関係を破壊して，コスモスや太陽，大地との結び付き，人類，国民，家族との生き生きとした有機的な関係を再びこの世界に築きあげることにあるのではないだろうか。手始めとして，まずは太陽と共に始めよ，そうすれば他のことも徐々に回復して来るであろう。」(23)

個人は決して単独な存在とはなり得ない。個人は彼を取り巻いている家族，地域，国，文化，文明，そして宇宙の秩序，すべての有機的な繋がりの中に存在しているのではないだろうか。ロレンスと同時代に生きた心理学者のC. G. ユングは，「集合的無意識」という用語を使用して，我々のうちにある個人的な経験の痕跡をはるかに超えた人類共通の表象の可能性を秘めた無意識層を説明しているが，この中にあっては個人の意識はほんのわずか表面に出ているものにすぎないのである。ところが現代の我々は，そのわずかに出ている「表面的な自我」に全信頼を傾け，あらゆる繋がりを放棄して「我」を主張している状態にある。そして，このような表層の精神的な意識に捕らわれてしまっている現代文明の住人を精神と肉体のバランスのとれた人間に回復させるためのビジョンとして，ロレンスは「コニー」を「森」へ向かわせたのだろうと思われる。ロレンスは数多く書かれた著作の中で「性」というものを「宇宙のリズム」とか「血の交わり」

などという言葉で説明することがあるが，彼は現代文明に汚染された人間がもしも宇宙との有機的な繋がりを取り戻せるという可能性があるとするならば，それは男女の個性を超えた性や性交の中にあるのではないかと考えたのではないだろうか。「性」という，ある意味で個性を超えた無意識的な男女の結合，それはあらゆる有機的な連繋の中でもっとも最小の単位だが，まず手始めとして，そのような最小単位の結び付きから浄化していこうとロレンスは考えたのであろうと筆者には感じられる。ところが，現代の我々の「性」に対する考え方は，ロレンスのいくつかの著作が発売禁止処分になってしまったことからも推測できるように，非常に観念的なものになってしまっている。この強固な観念を破壊して，肉体に正当な位置を与えるためには相当な荒療治が必要であり，ロレンスが『チャタレイ夫人の恋人』の中で，キリスト教的な道徳に挑戦しているかのように性的交渉の場面がくり返し描いているのもこの強固な観念を破壊するための手段だったのであろう思われるのである。

結　論

ロレンスは数多く残された作品の中で，現代人が失ってしまっている宇宙・自然との有機的な連帯感を回復させるためのビジョンを描いているが，本論で考察した『馬で去った女』と『チャタレイ夫人の恋人』もそのようなビジョンを描いた作品に含まれるものであろう。短編『馬で去った女』では，ヒロインをインディアンと遭遇させることによって「彼女」の内面を支配していた表層的自我を麻痺させ，インディアン社会の再興のための「犠牲」となる道を歩ませた。この「犠牲」の儀式が本当にインディアン社会の再興に繋がるものだと考えるのならば，「彼女」の死というものは女性原理的・異教的な社会への移行の可能性を象徴的に示唆しているものとも考えられる。同様に『チャタレイ夫人の恋人』では，「コニー」を森へと逃避させ，自然とのふれあい・メラーズとの性的交渉を経験させることで，

彼女の表層的自我の殻を破らせ，ひとりの女性としての肉体的・根源的な自我を目覚めさせた。「コニー」はメラーズとの性的交渉の中で「自分自身が死んでしまう」という感覚を体験しているが，ロレンスの考えでは，古い自我の殻を破り捨てるためには，そのような「死」を乗り越えなければならないものであったのだろう。『馬で去った女』のヒロインに，インディアンの「犠牲」になるという「死」が与えられることも同様の意味があるのではないだろうかと筆者には感じられる。そして，この両作品にみられるような肉体的・根源的・本能的・女性的・直観的・無意識的なものへの「再生」(再び価値を見い出すこと) こそが，袋小路にある現代文明に対してロレンスが提示したビジョンであったのではないだろうか？

果たして，今日の我々にとって「表層の自我」の殻を破り捨て，「深層の自我」を呼び覚まし，宇宙・自然・他者との有機的な連繋を取り戻すことができるであろうか？　次の詩はロレンスの晩年の詩集『最後の詩集』(*Last Poems*, 1932) に含まれている『続・三色すみれ』(More Pansies) からの一編である。

The EGOISTS

The only question to ask to-day, about man or woman
is: Has she chipped the shell of her own ego?
Has he chipped the shell of his own ego?
They are all perambulating eggs
going: "Squeak! Squeak! I am all things unto myself,
yet I can't be alone, I want somebody to keep me warm."(24)

ロレンスが現代を「本質的に悲劇的な時代」(25)として位置づけたのは，決して彼の思い上がりからなどではなかったはずである。たしかに近代文明は現代にいたるまで科学的にめざましい進歩を成し遂げてきた。しかし

ながら，その反面において自然環境の破壊や人間の疎外化という現代の状況をかえりみるならば，将来的に明るい見通しの予想や展望など考えられないと言っても過言ではないであろう。ロレンスが近代文明の疾病として捉えたものは，近代合理主義であり，ピューリタニズムであった。理由は，これらの思想が，今日まで西欧社会の中で連綿として継承されている中核的な思想ではあるが，反面で人間の本質的・根源的な自我を抑圧するものでもあったからである。ロレンスはその精力的な執筆活動を通して，人間としての本質的・根源的な自我に目覚める必要性を説き，その追求に全てを捧げてきた作家であったと言えるだろう。上記に引用した「利己主義者たち」も，ロレンスの集約的思想の現われとして受け止めることができる作品のひとつである。男性も女性も真の人間性を抑圧している表層の自我の "shell"（殻）を破らなければならない。さもなければ，その殻の中で腐敗していくしかないからである。殻を破れない人間はみな "perambulating eggs"（彷徨える卵）のままであり，"I want somebody to keep me warm"（だれかに私をあたためてもらいたい）と訴える利己的で不完全な存在である。ロレンスばかりでなく，我々全ての人間が切望してやまない他者との有機的な連帯感を回復させるためには，まずは表層的自我，言葉を変えるならば，現代の理性偏重主義を捨て去らなければならないのではないだろうか。

（1）D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature*, 1924, (London, Heinemann, 1964), p. 80.（訳出　塩崎）＊ 誌面の都合上，原文は省略した。

（2）1913. 1. 17　挿絵画家のアーネスト・コリングス（Ernest Collings, 1882-1932）に宛てた手紙の中には次のような一節がみられる。

「My great religion is a belief in the blood, the flesh, as being wiser than the intellect. We can go wrong in our minds. But what our blood feels and believes and says, is always true.……」

（3）Walter J. Ong, 桜井直文・林正寛・糟谷啓介共訳，『声の文化と文字の文化』（東京，藤原書店，1991），p. 166.

（4）T. S. Eliot, 'The Hollow Men', 1925

＊ この詩は次のような書きだしで始まっている。

We are the hollow men

We are the stuffed men
Leaning together
Headpiece filled with straw. Alas!

(5) D. H. Lawrence, 'Women are so cocksure' in *PHOENIX*, 1936, (London, Heinemann, 1961), p. 167. (訳出　塩崎)
(6) Ibid., 'Nottingham and Mining Countryside' in *PHOENIX*, p. 138. (訳出　塩崎)
(7) D. H. Lawrence, 岩倉具栄訳『ロレンス短編集・馬で去った女』』(東京, 新潮文庫, 1937), p. 131-132.
(8) Ibid.,『馬で去った女』, p. 147-148.
(9) Ibid.,『馬で去った女』, p. 163.
(10) Ibid.,『馬で去った女』, p. 169-170.
(11) Ibid.,『馬で去った女』, p. 175.
(12) D. H. Lawrence, 伊藤整訳『チャタレイ夫人の恋人』, (東京, 新潮文庫, 1964), p. 98.
(13) Ibid.,『チャタレイ夫人の恋人』, p. 186.
(14) Ibid.,『チャタレイ夫人の恋人』, p. 188.
(15) D. H. Lawrence, *Apocalypse*, 1931, (London, Heinneman, 1972), p. 103. (訳　福田恒存)
(16) D. H. Lawrence, 'Apropos of Lady Chatterley's Lover' in *PHOENIX II*, (London, Heinemann, 1968), p. 492. (訳出　塩崎)
(17) Ibid., 'Apropos of Lady Chatterley's Lover', p. 493.
(18) Ibid., 'Apropos of Lady Chatterley's Lover', p. 494.
(19) D. H. Lawrence, Lady Chatterley's Lover, 1928, (Middlesex England, Penguin Books, 1990), p. 121-122. (訳出　塩崎) ＊ 翻訳削除部分は筆者の訳とした。
(20) Ibid., L. C. L, p. 131. (訳出　塩崎)
(21) Ibid., L. C. L, p. 180-181. (訳出　塩崎)
(22) Ibid., L. C. L, p. 257-258. (訳出　塩崎)
(23) Ibid., *Apocalypse*, p. 104. (訳　福田恒存)
(24) D. H. Lawrence, The Complete Poems of D. H. Lawrence III, (London, Heinemann, 1957), p. 29.
(25) Ibid.,『チャタレイ夫人の恋人』, p. 1.